JRRN 会員寄稿（3） JRRN Member Contribution

河川書の探求(10)

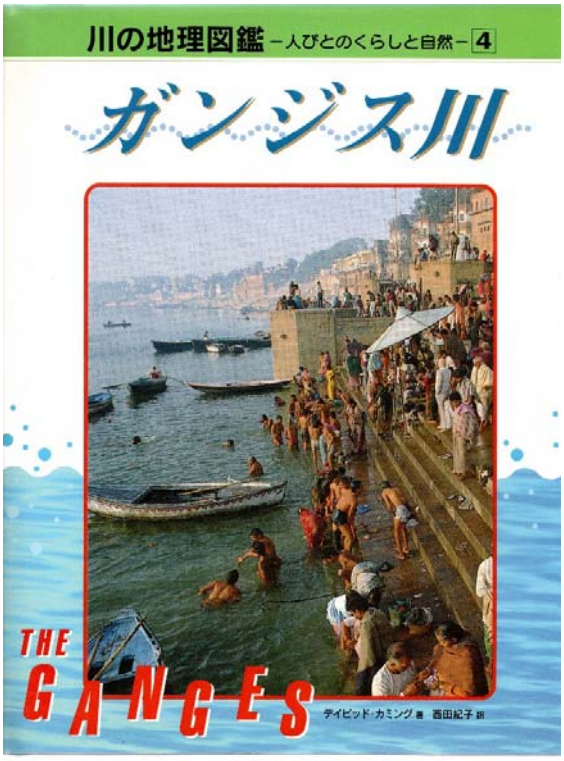
ガンジス川の流れ

古賀邦雄・古賀河川図書館（JRRN 会員）

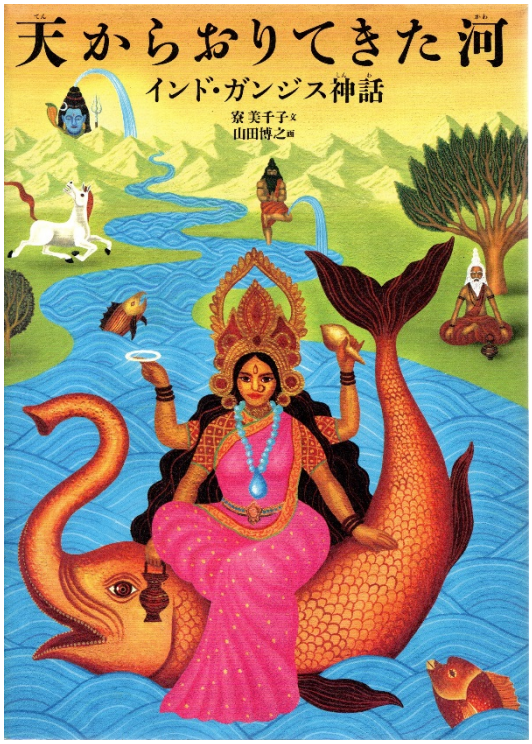
1.ガンジス川－源流から河口まで

ガンジス川は、ヒマラヤ山脈のガンゴトリ氷河から溶けた水がバーギラティ川を下りアラカナンダ川と合流し、ここからガンジス川となる。この水源から河口ベンガル湾まで、中国、ネパール、ブータン、インド、バングラディシュの 5 ヶ国の流域を流れる。延長約 2,500km、流域面積約 173 万 km^2 の国際河川である。

児童書、ディビッド・カミング著『**ガンジス川**』(偕成社・1995 年)から、その流れを追ってみる。氷河から 500km 下ると、ハルドワールの町に入る。ハルドワールに 1854 年に建設された上ガンジス用水路は灌漑用水路として、60 万 7,500ha を潤し、水力発電用のダムに使われている。さらにバラナシを下り、沐浴の街パトナでは、ガガラ川、ガンダク川、ソン川などと合流する。



大河となったガンジス川はヒンドスタン平原を蛇行しながら流れる。パトナから下ると、ガンジス川は二つの流れに分れる。一つはインドの国境を越え、ブラマプトラ川と合流してバングラディシュに向かってながれるパドマ川、もう一つは南へ向かうフーグリ川である。ガンジス川の河口(パドマ川、フーグリ川)は 7,700km^2 に及ぶデルタ地帯である。川は沢山の細い流れになって 50 以上もある島々を迷路のように流れる。海水と混じりあった世界最大級のマングローブの密林が拡がる。また、上流からの土砂の流れが海底扇状地を形成している。ジ―ナ・ダグラス著『**ガンジス川**』(帝国書院・1987 年)は、流れに沿って、都市を紹介する。また、児童書として、奈美千子・文/山田博之・画『**天からおりてきた河－インド・ガンジス神話**』(長崎出版・2013 年)がある。



2.ガンジス川の巡礼

インドの人口 13.4 億人、そのうち約 78%がヒンドゥー教徒である。ヒンドゥー教は身分の低い者でも、生きている間良いことをしておけば、死んだ後でも生まれ変わるという輪廻思想がある。教徒たちはガンジス川の神聖な川に沐浴をし、ガンガーの女神に祈り捧げ、死後は死体を焼き、灰をガンジス川に撒いてしまうことを願っている。巡礼の書を掲げる。

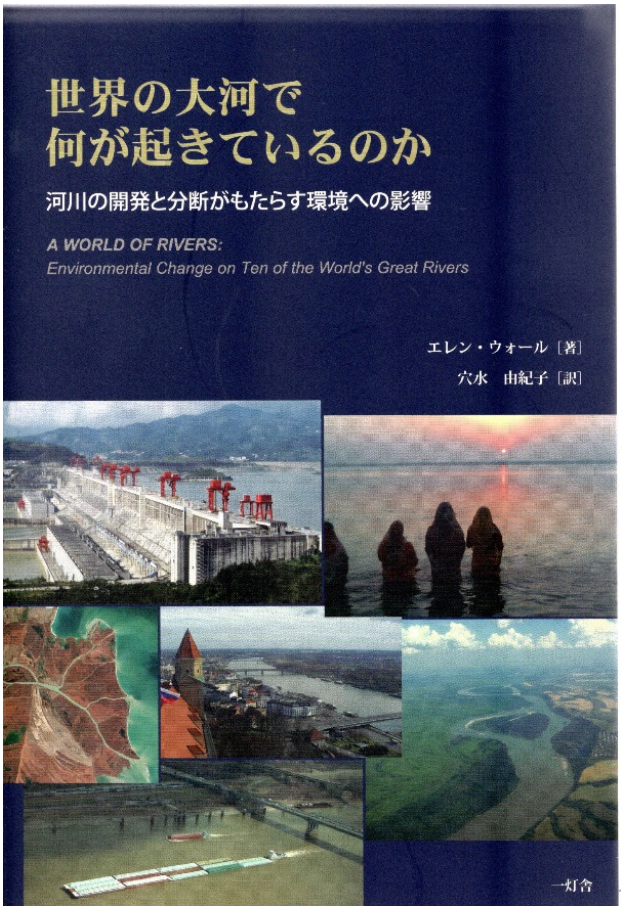
中村元・肥塚隆著『**ガンジスの聖地**』(講談社・1979 年)、直田龍作著『**河への祈り ガンジス巡礼**』(クレオ・1997 年)、ラグビール・シン著『**ガンジス**』(岩波書店・1992 年)。

野町和嘉著『**ガンジス**』(新潮社・2011 年)は、ガンジス川での沐浴者を映しだす。野町は次のように述べている。

「ヒマラヤの雪解け水に始まるガンジスの流れ、生命を育み、人々の願望と来世の祈りを託されて流れゆく間に、その底流には、インド社会に堆積した悲惨や汚濁からなる泥の層を堆積させ、河口へと押し流してきたのである。恍惚の沐浴絵図を眺め

ながら、夥しい数の巡礼者たちがこうして、一同祈ることによって、彼ら自身の心の浄化の一方、汚濁を底流に含んだガンジスの流れを、じつは精神のフィルターにより浄め海に還してているのではと思えるようになった。そう、浄化された水はやがて天にのぼり、モンスーンの雨となって、ヒマラヤの峰々に降りそそぎ、ガンジスの聖水として甦るのである。ガンガーの女神、永遠の輪廻転生」

白石凌海著『**インド　輪廻に生きる　大沐浴祭**』(明石書店・2002 年)がある。



3.ガンジス川の国際水紛争

ヘザー・L・ビーチ他著『**国際水紛争事典**』(アサヒビール・2003 年)、アシット・K・ビスワス/橋本強司編著『**21 世紀のアジア国際河川開発**』(勁草書房・1999 年)により水紛争をみて見たい。インドはバングラディシュの合意なしに、ガンジス川分流のファラッカにダムを建設・運営している。このため「ガンジス川水協定」が締結された。ファラッカにガンジス川の水を分け合うこと、ガンジス川の増水期については、長期的な解決策を編み出すこと、なお、協議が続いている。

エレン・ウォール著/穴水由紀子訳『**世界の大河で何が起きているのか－河川の開発と分断がもたらす環境への影響**』(一灯舎・2015 年)は、インドのファラッカダムがバングラディシュに悪影響を及ぼしていることは河川改修を巡る問題であり、乾期の流量が少ない期間国家間および地域間で水を公平に分配する必要性を、さらにガンジス川沿岸の洪水被害を減らす必要性を説いている。

以上、いくつかの書にて、ガンジス川について見てきたが、聖地の川、輪廻転生の川であり、さらには下流域では国際河川の水紛争が絶えない河川である。

＜生者死者包みガンジス朝焼けて＞　(高橋　薫)